
猫

小坂戒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

猫

【Nコード】

N7784G

【作者名】

小坂戒

【あらすじ】

猫への偏見をもって見てみました。

人間は週に一回は必ず爪を切るとても変わった生き物だ。

爪を生活に活かすということをしないうために、有益な爪をむざむざと切ってしまうのだ。

人間が無益な事をどれほど繰り返そうとも特に問題は無い。

むしろ、私が如何に高尚な生き物なのかを雄弁に物語っている。

それなのに、人間は自らの爪を切り終えた後にすぐさま私の爪を覗き込み、必ず削る。

始めのころには壁紙に自らの証を刻んで、人間に大声を出された記憶がある。

耳元であまりに大きな声を出されたものだから、それ以来は二度としない。

そもそも私は繊細な生き物なのだ、大声などという野蛮な方法は金輪際行使しないでもらいたいものである。

人間にとって自らの空間を許可なしに変えられるという行為が気に食わないのは良く分かる。

私にとっても環境というものはとても大事だからだ。

その点、人間と私は敵対していない。

自らが暮らす領域に過度に踏み込むことはお互いに無い。

それほど興味が無いという事でもある。

ほぼ三度の交流の時間は当然設けている。

互いに近くに暮らしているのであるから、いない者のように振舞って良い事はない。

そろそろ人間が私の食事を捧げ持つてくるはずだ。

飼われている、という状況がそれほど愉快なものではないが私はそれを従容として受け入れる。

王者とは常に余裕を持ち、食事の調達などは下々の存在の責任だ。

だから、人間が私の顎を指でくいと撫でさするのを許してはならないのだ。

しかし、手を傷つけてやるのは少々気の毒である。

仕方ない、少しだけ愛想を振りまいてやろう。

特別大きく息を吸い込んで、人間を見上げる。

「ミヤー」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7784g/>

猫

2010年10月15日21時00分発行